

平成 22 年 4 月 16 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18320076
研究課題名（和文）
中英語後期から近代英語にかけての言語的性質の変容に関する研究
研究課題名（英文）
Linguistic Changes from Late Middle English to Early Modern English
研究代表者
家入 葉子（IYEIRI YOKO）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：20264830

研究成果の概要（和文）：従来の英語史研究では、古英語・中英語研究が中世英語研究としてそのほかの時代の研究から独立する傾向が強く、近代英語期以降の研究との連携に重点がおかれてこなかった。しかしながら、古英語期に始まった多くの言語変化は中英語後期に加速し、初期近代英語期以降の言語発達との間に密接な関係を有することがわかってきている。本研究は、中英語から初期近代英語につながる時代に焦点をあて、その連続性を明らかにするとともに、連続性を意識することが現代英語の理解に資することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Previous studies in the history of English do not necessarily stress the link between medieval English (Old and Middle English) and Modern English. There is an increasing awareness, however, that most major changes in the history of English become prominent towards the end of the Middle English period and accelerate in the course of the early Modern English period. Our research in the past four years has shown that the link between medieval English and Modern English needs to be highlighted to a greater extent in historical studies, at least in linguistic terms, and that the understanding of this period will contribute to a deeper understanding of Present-day English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2007 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2008 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2009 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
総計	11,100,000	3,330,000	14,430,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：3003

キーワード：中英語・初期近代英語・語順・不定詞・定型句・ワードペア

1. 研究開始当初の背景

従来の英語史研究では、古英語・中英語研究がそれぞれの時代で完結する傾向が強かった。しかしながら、古英語期（～1100 年ごろまで）に始まった多くの言語変化は中英語（1100 年頃～1500 年頃）の後期に加速し、

初期近代英語期以降の言語発達との間に密接な関係を有することがわかってきている。そこで、英語の通史全体を見渡す研究が必要ではないかと考え、古英語を専門領域としている大門、尾崎、中英語および近代英語を専門領域としている家入、谷の 4 名で、4 年間

の研究に着手することとした。

2. 研究の目的

すでに1の「研究開始当初の背景」にも述べたように、英語の史的な研究においては、一般に、古英語研究・中英語研究が、近現代英語研究と分離する傾向が強かった。しかしながら一方で、近年の学術的な傾向として、中英語期までの時代に起こったさまざまな言語現象を、現代英語の理解に役立てようとする流れがある。古英語・中英語は、一見現代英語とは大きくかけ離れているようにも見えるが、実際には、現代英語の理解に資する多くの現象を示すことがわかっている。特に世界英語、英語の地域方言・階級方言に学術的な関心が向けられるようになった20世紀の後半以降は、英語の通史を理解することなくして、現代英語の分析をすることは難しくなってきた。そこで、本研究では、現代英語のさらなる理解を前提に、英語の連続性を探ることを目的とした。

ただし、4年間の研究では、全ての時代を明らかにすることは難しいので、これまで特に切り離される傾向が強かった中英語期から初期近代英語期を調査の対象とし、英語史全体を視野に入れながらも、この時期の言語的連続性を探ることとした。

3. 研究の方法

4名の研究者が研究の方針を確認したあと、それぞれの研究者が得意分野を中心に、時代を広げながら研究を進める方法を取った。英語の記述的研究においては不可欠となっている電子テキスト（コーパス）を利用しながら研究を進める過程で、インスブルック大学との連携を進めることとした。インスブルック大学は、中英語散文のコーパス、および初期近代英語の書簡のコーパスを作成したことで知られており、これらのコーパスの使用は本研究の遂行においてきわめて有効であると判断したからである。またインスブルック大学との提携を通して、世界各地のコーパス言語学者との学術的交流も行った。

4. 研究成果

上記の目標に従って、研究代表者の家入は動詞の構文および否定構文について、研究分担者の大門は主に語順や文体について、谷と尾崎は語彙や定型表現等について、古英語から中英語を経て近代英語に至る通時的な視点から言語を分析し、その研究成果を論文等の形で発表した。ここでは、主な成果、国内外におけるインパクト、今後の展望について述べることにする。

(1) 主な成果

4年間の研究を通じて、現代英語の背景に1500年の英語の歴史があり、この点を理解することで、現代英語の実態の把握がより正確になることが明らかになった。この点は、語彙、文体、翻訳における慣習、統語論など今回の研究で取り上げた全ての方面に共通しているが、とりわけ統語論的な視点から興味深いのは、現代英語における語法の問題に英語の歴史が関係している場合がほとんどであるという点である。

たとえば、現代英語の動詞 *forbid* は不定詞を従えるが、定型的な表現として *God forbid* を用いる場合には、*that* 節が続く。これまでの現代英語文法では、これを単なる例外として扱う傾向があったが、英語の連続性という視点から見た場合には、中英語期まで動詞の *forbid* が普通に *that* 節を従えていた事実が重要になってくる。おそらく仮定法の衰退の過程で *that* 節の地位が低下し、これと入れ替わるようにして *to* 不定詞が発達したのである。このプロセスの中で、*God forbid* が取り残されて現代に至っているのである。

さらに興味深い点は、いくつかの動詞においては、*to* 不定詞がさらに動名詞に置き換えられているプロセスを観察することが出来る点である。たとえば動詞の *prohibit* は、*forbid* と同様に *that* 節から *to* 不定詞への交替を経験したあと、今度は *to* 不定詞から動名詞への交替を経験する。また、さらなるプロセスとして、単独で動名詞を従えていたものが、*from* + *-ing* を取るようになるという、動名詞発達の第二段階を経験している。このような構文の変化のタイミングは動詞によって異なるが、全体としてみた場合に、ちょうど本研究が扱った中英語の終わりから初期近代英語期に *that* 節の頻度の減少とこれにかわる *to* 不定詞の増加が起こり、これがきっかけとなって、次の段階の動名詞の拡大（後期近代英語）が起こるようである。

本研究は、このような言語変化の連続性と現代英語における意味づけを、コーパスを使って、計量的に明らかにした。

(2) 国内外におけるインパクト

国内におけるインパクトの中で特筆すべき点は、英語史研究と現代英語研究をつなぎ、英語の発達史を理解することが現代英語の理解に資することを、具体的な研究成果を持って示したことである。また、英語史研究においても古英語・中英語研究と近代英語期以降の研究の間に溝があったが、本研究では、この時期の連続性こそ英語史全体を見渡す上で重要であることを示すことができたといえる。

国外との関係では、比較的初期の段階から

インスブルック大学との協力関係を強め、言語データの増強を図ったことで本研究そのものが順調に進行したとともに、研究成果を国外の研究者にもスムーズな形で公開することが出来た点をあげることができる。提携そのものは2007年以降継続的に進め、2008年からはインスブルック大学での中英語・近代英語のコーパス利用に関する国際学会の開催を計画した。これを実行に移すことができたのは、2009年7月、すなわち研究期間の最終年度である。本研究グループからは、研究代表者の家入と分担者の谷がこれに参加し、本研究の成果を報告することができた。コーパスの作成では、現状ではやはり欧米の方が盛んであるといわざるをえないものの、コーパス利用による言語研究では我が国の研究の進展はめざましいものがあり、2009年の国際学会では、この点を明確な形で示すことができたといえよう。

(3) 今後の展望

4年間の研究期間においては、とりわけ中英語と初期近代英語をつなぐ時期と関係がありそうな言語事象を選びながら研究を進めてきたが、中英語から初期近代英語への移行期は、そもそも英語の中で変動が大きかった時代であり、本来ならば特定の言語現象に限らず、英語を通史的に見る場合には、あらゆる事象において注目すべき時代であるともいえる。本研究期間においては、時間が限られていたので、扱うテーマを、研究代表者および研究分担者がもともと専門領域としていた分野に限らざるをえなかった。今後、新たな研究プロジェクトに取り組む際には、さらに調査を行う項目を増やして、英語の発達史を全体として見渡すことができるよう工夫すべきであろう。

またコーパスを使って中英語から近代英語へのつながりを明らかにする取り組みについては、2009年の国際学会の段階でも、将来への期待が大きく、今後も国際的な協力関係を強めながら、研究を進めていきたいと考えている。可能ならば、2009年の国際学会の主旨を受け継いだ第2回目の学会を日本で開催することも視野に入れて、研究を継続的に進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

① 家入葉子 「英語の否定構文における *neither A nor B* と *neither A or B*」『英語史研究会会報 研究ノート』2006年号: 1-5. 2006. 査読なし.

② 大門正幸 “Stylistic Fronting in Middle English”. *Journal of the College of Humanities* 17: 13-33. 2006. 査読なし.

③ 尾崎久男 「キャクストン訳『きつね物語』における「動作名詞」表現—中期オランダ語による原典との比較—」『言語文化研究』32: 51-70. 2006. 査読あり.

④ 家入葉子 “Unsupported Negative *ne* in Later Middle English”. *Notes and Queries* 55: 21-23. 2008. 査読あり.

⑤ 家入葉子 「Doubt にかかわる構文の歴史的变化について—*The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から—」『九大英文学』50: 317-338. 2008. 査読なし.

⑥ 大門正幸 “Language Structure as a Cultural Reflection”. *Identity in Text Interpretation and Everyday Life*, 121-131. 2008. 査読なし.

⑦ 大門正幸 「統語的变化を中心に見た中英語と近代英語の接続」『中部大学人文学部研究論集』21: 25-41. 2009. 査読なし.

⑧ 尾崎久男 「仏・英語間の「なぞり」(Calques) に関する一考察」『言語の歴史的变化と認知の枠組み』59-68. 2009. 査読なし.

⑨ 家入葉子 “*I fear*: The Historical Development of the Verb *fear* and its Changing Patterns of Complementation”. *Studies in Modern English* 25: 19-39. 2009. 査読あり.

⑩ 大門正幸 “Foreign Language Influences in the History of English”. *The 81st General Meeting of the English Literary Society of Japan, 30-31 May 2009*, pp. 230-231. 2009. 査読なし.

⑪ 尾崎久男 「フランス語動詞 *approcher* が前置詞 *de* を従える理由: 類推および混淆の観点から見た一仮定」『言語文化共同研究プロジェクト 2009: レトリックの文化と歴史性』67-75. 2010. 査読なし.

[学会発表] (計16件)

① 大門正幸 “Stylistic Fronting in Old English Prose”. SHELL2007 (名古屋大学). 2007年9月7日.

② 谷明信 “Word Pairs or Doublets in the Paston Letters”. SHELL2007 (名古屋大学). 2007年9月8日.

③ 大門正幸 「データ公開の重要性」日本英語学会第25回大会シンポジウム (名古屋大学). 2007年11月11日.

④ 家入葉子 「*The Oxford English Dictionary* の引用文データを利用した英語史研究—*doubt* の検索例を中心に—」日本英語学会第25回大会シンポジウム (名古屋大学). 2007年11月11日.

⑤ 大門正幸 “Language Structure as a Reflection of Cultural Schema”. *Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration*

International Conference (名古屋大学) . 2008年2月10日.

⑥ 家入葉子 “Money makes the mare to go or Money makes the mare go: The Verb to make and its Causative Constructions in Caxton’s English”. Hawaii International Conference on Arts and Humanities (ホノルル) . 2008年1月12日.

⑦ 大門正幸 「統語的变化を中心に見た中英語と近代英語の接続」近代英語協会第25回大会 (広島女学院大学) . 2008年5月23日.

⑧ 大門正幸 “Stylistic Fronting in the History of English”. 国際英語歴史言語学会15回大会 (ミュンヘン大学) . 2008年8月26日.

⑨ 家入葉子 「中英語文学作品の校訂を考える——Chaucer の Boece を中心に」日本英文学会第81回全国大会 (招待発表) (東京大学駒場キャンパス) . 2009年5月31日.

⑩ 大門正幸 “Foreign Language Influences in the History of English”. 日本英文学会第81回大会シンポジウム (東京大学駒場キャンパス) . 2009年5月31日.

⑪ 家入葉子 “Causative make and its Complements in Late Middle English: Using the ICAMET or the Innsbruck Computer Archive of Machine-Readable English Texts”. Middle and Modern English Corpus Linguistics (インスブルック大学) . 2009年7月7日.

⑫ 谷明信 “The Binomials in the Computerized English Dialect Dictionary”. Middle and Modern English Corpus Linguistics (インスブルック大学) . 2009年7月7日.

⑬ 谷明信 “Word Pairs or Doublets in Chaucer’s *Melibee* and their Variant Readings: A Stylistic Examination”. Studies in the History of the English Language and Linguistics 2009 (広島大学) 2009年8月28日.

⑭ 家入葉子 「否定を含意する動詞とその補文構造の歴史的変遷」日本英文学会九州支部第62回大会 (宮崎大学) 2009年10月24日.

⑮ 谷明信 “Applying English Dialectology to HEL Pedagogy”. 2010 Hawaii International Conference on Education (ホノルル) 2010年1月7日.

⑯ 家入葉子 “Another Look at Fragments A, B, and C of the Hunter Manuscript of *The Romaunt of the Rose*: A Linguistic Analysis”. Hawaii International Conference on Arts and Humanities, 8th Annual Conference (ホノルル) . 2010年1月13日.

[図書] (計9件)

① 小倉美知子 (編)、家入葉子・大門正幸・他 (執筆) *Textual and Contextual Studies in Medieval English: Towards the Reunion of Linguistics and Philology* (Peter Lang) 2006. 216 ページ.

② Ch. Mair & R. Huebner (編)、谷明信・

他 (執筆) *Corpora and the History of English. Paper Dedicated to Manfred Markus on the Occasion of his Sixty-Fifth Birthday* (Universitätsverlag Winter). 2006. 358 ページ.

③ 今井光規・西村秀夫 (編)、谷明信・他 (執筆) 『ことばの響き』 (開文社) . 2008. 237 ページ.

④ 天野政千代・他 (編)、大門正幸・谷明信・他 (執筆) *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts* (Peter Lang). 2008. 403 ページ.

⑤ 田島松二・末松信子 (編)、谷明信・尾崎久男・他 (執筆) 『英語史研究ノート』 (開文社) . 2008. 428 ページ.

⑥ 家入葉子 *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English* (John Benjamins). 2009. 224 ページ.

⑦ John Ole Askedal・他 (編)、家入葉子 (執筆) *Germanic Languages and Linguistic Universals* (John Benjamins). 2009. 214 ページ.

⑧ Ute Römer & Rainer Schulze (編)、家入葉子 (執筆) *Exploring the Lexis-Grammar Interface* (John Benjamins) 2009. 322 ページ.

⑨ John Ole Askedal・他 (編)、家入葉子、谷明信 (執筆) *Noam Chomsky and Language Description* (John Benjamins). 2010. 225 ページ.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等 該当なし

6. 研究組織
(1)研究代表者

家入 葉子 (IYEIRI YOKO)
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：20264830

(2)研究分担者

大門 正幸 (OHKADO MASAYUKI)
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：70213642

谷 明信 (TANI AKINOBU)
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：90236670

尾崎 久男 (OSAKI HISAO)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：60268381

(3)連携研究者

該当なし